

萱

2019·10

風萱集

亀田虎童子

肩書の無くて長生き泥鰌鍋
千匹の蝉鳴く山の目眩かな
ひとしきり眼鏡のくもる熱帯夜
遠き日をたぐり寄せたる巴里祭
指先に老いのあつまる青葡萄

木村 嘉男

笹舟にのりて父母どち着きませり
送り火やこころけけれと河鹿鳴き
衣擦れのかそけく咲くや月見草
咲きにけり黄泉へしるべの鵲瓜
蛇さりて草の波たつ風の音

小島 良子

八月や鸚鵡は足の裏を見せ
立て掛けてありパラソルと捕虫網
着ぐるみの頭大きく夏休み
全身に浮ける静脈谷崎忌
採血の跡の黒ずむ餓鬼忌かな

出牛 進

誕生日忘れさせたる極暑かな
叡山を柱に分くる夏座敷
秋暑しどつかと虚子の句碑のある
日照雨して秋の日差の二上山
参道の築地の崩れ蟬時雨

松下 道臣

路地裏はむかし遊び場傘雨の忌
そはそはすとぎれとぎれの祭笛
風絶えてぐうたら兵衛の鯉のぼり
筈をさぐる足うら眼のありし
水鉄砲降参するも容赦なき

萱集

進選

女子の旅噴水燦と高あがり
野面積み天守吹きゆく土用あい
小舟より流灯ひとつまたひとつ
櫓をさばき昨夜の流灯掬ひゆく
放送の迷子へ走る祭髪

東京 武田 未有

占ひに金運ありと胡瓜揉む
線香の匂ふ祖母の間麦こがし
花瓶よりコップのよけれ秋桜
手に伝ふ猫の心音夜の秋
いにしへ人の声か蝸国分寺

東京 中山 恵子

扇風機猫の鳴き声出す不思議
岸辺には救助訓練蓮見舟
四日目の蓮の花托の黄色とは
区役所の向日葵かせお・も・て・な・し
藤壺の殻覗きみて涼し

東京 光成 敏子

百日紅咲く不揃ひに重さうに
酷暑なり無人の駅の被弾木
墓地までの道程とほし蝉時雨
秋の川砂利積む船の吃水線
青柿や元気な姉のくりごとも

東京 加倉井たけ子

アクアラング真夏の少年魚となる
猫と夜を過ぎあぐねし薄暑かな
老猫の介護の日々や秋に入る
秋天や富士の映れる硝子拭く
糸のころや猫は葉を食べ穂は雀

埼玉 谷田貝順子

昔日や兄の指添ふかき水
みちのくや氷菓売り来る下校道
涼しさや寝具一式水の色
降り立ちて初蝉を聴く夕かな
三日三晩干したる梅の湿りかな

千葉 柳田 秀子

夏霧や碓氷峠の往き復り
長梅雨や雨雨曇り雨曇り
誰しもが今日は初めて明易し
長梅雨の選挙列島生乾き
初蝉の昨日の今日は声探す

東京 ふなかわのりひと